[head](koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。  
  
子張第十九

１）子張曰士見危致命見得思義祭思敬喪思哀其可已矣

zǐ zhāng yuē shì jiàn wēi zhì mìng jiàn dé sī yì jì sī jìng sāng sī āi qí kě yǐ yǐ  
子張が曰く、士は危きを見て命を致す。得を見て義を思ふ。祭りに敬を思ふ。喪に哀を思ふ。其れ可なるのみ。  
  
子張が曰く、「士は危難に出会へば授かった命を果たす。職を得れば義を思ふ。祭祀には敬を思ふ。喪には哀を思ふ。それで士といへる。」

■　見危致命　[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/sityou.html)に曰く、「士は義理の名を知る。是れ升朝の士を謂ふなり。竝びに若し國に危難有るを見れば、必ず其の身を愛（いと）はず、死を以て當りて之を救ふ。是れ危を見て命を致すなり。士既に此の如し、則ち大夫以上知るべきなり。」士は国難にあたって身命を賭す。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「命を致すは、其の命を委ね致すを謂う。猶命を授くと言うがごとし。」危難に当たって、授かった命を果たす。命は「思」するものではなく「致」すべきこと、それは「危」に際して躊躇なく行はれるべきもの。以下は行為に際して「思」さるべきもの。■　見得思義　義疏は、「得は祿を得るなり。」、祿を得るときに考えるべきことは｢義｣。■　祭思敬喪　義疏は、「廟に立ち其の祭祀を守る。神を祭るに神在すが如くす。是れ祭るに敬を思ふなり。」神や祖霊がそこに居られると思って祭祀すべし。■　喪思哀　義疏は、「三年君の爲に喪すに方（あた）り、父母に必ず苴斬に窮すが如くす、是れ喪に哀を思すなり。」苴斬、苴は喪中用いる黒い竹の杖、斬は布を切っただけの喪衣で、深い悲しみを表す。■　其可已矣　それで成り立つ。義疏は士が君に仕える心得とする、集註は、「四つの者は身を立つるの大節なり」ともう少し一般化して見ている。  
[憲問篇13](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kenmon.doc)）に「利を見て義を思ひ、危を見て命を授く」、[八佾篇4、12、26](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)）に、「喪は其の易よりは寧ろ戚すべし。」「祭るに在すが如くし、神在すが如く神を祭す。」「禮を爲して敬まず、喪に臨み哀しまずば、吾何を以て之を觀るかな。」とある。子張は、孔子の言葉を自分なりに咀嚼した。先生は、幾多の危難にあっても、己の天命、使命を果たそうとされた。仕官とは義を行ふ、民の安寧を計る政（まつりごと）を行ふことであり、それは神霊と祖霊の願いでもあり共に歩まんとされ、死者を哀悼し、己の生を全うせんとされた。その師の姿をここに凝縮せんとした。

この篇は孔子没後の弟子の言動であろう。

読書会：[2010年2月13日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2010年2月13日)　春節大年夜

２）子張曰執德不弘信道不篤焉能為有焉能為亡

zǐ zhāng yuē zhí dé bù hóng xìn dào bù dǔ yān néng wéi yǒu yān néng wéi wú  
子張が曰く、德を執ること弘からず、道を信ずること篤からず。焉ぞ能く有りと為せる。焉ぞ能く亡（なし）と為せる。  
  
子張が曰く、德をよく守っているも弘めない。道を信ずるも篤くない。どうして徳や道が有ると為せようか、どうして、徳や道が亡いと為せようか。  
  
■　執德　執は手に手械（てかせ）を加える形で、罪人を拘執するから執持、固く手に執る意となり、執禮はよく禮節を守る意（字統）。■　弘　弘は古くは、「弘（おほ）いに吉なり。（卜辞）」「小子なりと雖も、式（もつ）て弘大なり。（詩、大雅、民労）」あるごとく大きく、広いこと。德を執（と）ること弘（ひろ）からず（徳を自分の中だけに治め世に広めることがない）、となるが、強の意とし、固いと解釈することがあり、徳を執（まも）ること弘（かた）からず（徳を守ることが堅固でない）と訓じる。■　信道不篤　道を信じる気持が篤くない、だから、道を行ふことをやめる。道が行はれていないから、道などないと隠れるようなことをしない。■　焉能為有焉能為亡。どうして、徳や道が有るとなるか。どうして、ないとなるか？生きていても死んでいても何の影響もない（貝塚先生）、居ても居なくても同じ（金谷先生）義疏は、「弘は大なり、篤は厚なり、亡wúは無なり。人、徳を執（と）りて能く弘大に至り、道を信じ必ず篤厚せしむれば、此れ人世に於て乃ち重きを爲す可し。若し徳を執ると雖も弘めず、道を信ずと雖も厚からざれば、此れ人、世に於て重きに足る可からず、有るが如く無きが如し。」集註は、「得る所有りて之を守ること太だ狹きときは、則ち德孤なり。聞く所有りて之を信ずること篤からざるときは、則ち道廢る。焉んぞ能く有亡を爲さんは、猶輕重を爲すに足らずと言うがごとし。」とする。「亡wúは無なり」とするが、亡は有ったものが亡（な）くなること、無は必ずしもそうではない。

[衛霊公篇6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/eireiko.doc)）に、「子張、行を問ふ。子の曰はく、言、忠信にして、行、篤敬ならば、蠻貊の邦といへども行はる。言、忠信せず、行、篤敬せずば、州里といへども行はれようや。立ちて則ち前に其の參を見るなり、輿に在りて則ち衡に其の倚を見るなり。夫れ然る後に行はる。子張これを紳に書す。」とあった。司馬遷は、この問いは陳と蔡の間、囲まれて困窮の極みにあった時になされたと考えた。その危機にあっても、孔子が一心不乱、ひたすらその道を為さんとするを聞いて、才ではなく、その一を貫ぬく姿勢にガツンと身の引き締まる思いをしたことが忘れられなかったとみえる。  
読書会：[2010年2月20日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年2月20日)

３）子夏之門人問交於子張子張曰子夏云何對曰子夏曰可者與之其不可者拒之子張曰異乎吾所聞君子尊賢而容眾嘉善而矜不能。我之大賢與於人何所不容我之不賢與人將拒我如之何其拒人也

zǐ xià zhī mén rén wèn jiāo yú zǐ zhāng zǐ zhāng yuē zǐ xià yún hé duì yuē zǐ xià yuē kě zhě yǔ zhī qí bù kě zhě jù zhī zǐ zhāng yuē yì hū wú suǒ wén jūn zǐ zūn xián ér róng zhòng jiā shàn ér jīn bù néng wǒ zhī dà xián yú yú rén hé suǒ bù róng wǒ zhī bù xián yú rén jiāng jù wǒ rú zhī hé qí jù rén yě

子夏が門人、交りを子張に問ふ。子張が曰く、子夏が云ふこと何（いか）ん。對へて曰く、子夏が曰く、可なる者には之に與（くみ）せん。其の不可なる者をは之を拒（ふせ）がむと。子張が曰く、吾が聞く所に異なり、君子は賢を尊（とほとび）て眾（しゅう）を容れ、善を嘉（よみ）して不能を矜（あは）れむ。我が大賢か。人に於て何の容れざる所あらん。我が不賢か。人將（はた）我を拒がむ、之の如何ぞ其れ人を拒がむ。

子夏の門人が子張に交友について問ふた。子張は、子夏はどう云ふているかと問ひ返した。門人はこう応へた。先生（子夏）は、友とできる者は友となし、友とできない者は拒（こば）みなさい、とされました。子張はこう応へた。私が聞いたことは異る。君子は賢者を尊び、眾によく耳を傾け聞き、善をほめ、よろこび、不能を矜む。我がまことに賢者であれば、人が聞き入れぬことがあろうか（いやない）。我が賢者でなくば、人が將に我を拒もう。どうして、こちらから人を拒ばもうや。

■　子夏之門人問交於子張　子夏の門人と子張の門人は対立しがちであった。両師の性格の相違による。ここでは交友に関する両者の差が述べられる。■　可者與之其不可者拒之　子夏は、交わりを共にすることができる人間なら共にし、できない人間なら拒（こば）めとする。これは、「忠信を主とし、己に如ざる者を友とすること毋れ。過てば則ち改むるに憚かること勿れ（[學而篇8](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm))、（[子罕篇24](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.doc)) 。」といふ孔子の言葉に重きを置くものである。子夏は、こうも言っている。「賢を賢とし色を易へ、父母に事へるに能く其の力を竭（つく）す。君に事へるに能く其の身を致す。朋友と交はりて言ひて信有り。未だ學ばずと曰へども、吾必ずやこれを學ぶと謂はむ（[學而篇7](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm))。」また、「子夏、問ひて曰く、巧笑（こうしょう）倩（せい）たり美目（びもく）盼（はん）たり素を以て絢（あや）と爲す、何の謂ひなりや。子の曰はく、繪の事は素を後にす。曰く、禮は後か。子の曰はく、予を起すは商なり、始めて與に詩を言ふべきのみ（[八佾篇8](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)）。」子夏は詩に秀でた文人でもあった。孔子が子夏に対して懸念したことは、「君子の儒を爲し、小人の儒を爲す無かれ（[雍也篇11](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoya.htm)）」であった。以下にもあるが、子夏は小さなことにもよく注意を払った。■　子張曰異乎吾所聞　子張は、以下にあるごとく、子游によれば難しいことを能くなし、曾子によれば、堂堂としているが、仁には至らぬとみなされていた。若いが、孔子に対しても、臆せず率直に、禄（[為政篇18](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm)）、明（[顔淵篇6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)）、政（[顔淵篇14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)）、達（[顔淵篇20](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)）、行（[衛霊公篇6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/eireiko.doc)）、仁（[陽貨篇6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/yoka.doc)）を問うた。子張に対して孔子が懸念したことは、「師（子張）や辟（かざ）る（[先進篇17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/senshin.doc)）」ことであった。過差（失）を飾る、あるいは、容止（たちいふるまい）に習いて、誠實少なき、とされる。二人に対する孔子の評は、「師や過ぐる。商（子夏）や及ばず。（[先進篇15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/senshin.doc)）」どっちもどっち。■　容眾　容は聞き入れる、ゆるす、ゆったりしていること。■　嘉善　ほめる、よろこぶこと。古代には、人のてがらをほめるとき、神前で飲食を与えた。■　矜不能　あわれむは憐の借用。書経、泰誓上、「天、民を矜む、民の欲する所、天必ず之に従ふ」　矜には、つつしむ、うやまう、たっとぶ意味がある。不能であることが無教育によるものであるならこれをあわれむ。■　我之大賢與於人何所不容　我が大いに賢者であるとすれば、人が聞き入れないことがあろうか、いやない。■　我之不賢與人將拒我　我が賢者でないとすれば、人が我を拒む。■　如之何其拒人也　どうして人を拒むことがあろう。

集註は、「但其の言う所も亦高きに過ぎたるの弊（ついえ）有り。蓋し大賢は容れざる所無しと雖も、然れども大故は亦當に絶つべき所なり。不賢は固より以て人を拒むことある可からざれども、然れども損友は亦當に遠ざかるべき所なり。學者察せざることある可からず。」と子張の説は過ぎたるので注意すべしといふ。

読書会：[2010年2月20日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年2月20日)

４）子夏曰雖小道必有可觀者焉致遠恐泥是以君子不為也

zǐ xià yuē suī xiǎo dào bì yǒu kě guān zhě yān zhì yuǎn kǒng nì shì yǐ jūn zǐ bù wéi yě

子夏が曰く、小道と雖も必ず觀る可き者有らんや。遠きを致さば、恐くは泥（なづ）まん。是を以て君子は為さず。

子夏が曰く、小道といえども必ず觀るべきものはある。しかしあまりやりすぎると、泥沼にはまりこむ恐れがある。だから君子はそうしない。  
■　義疏は、「小道は諸子百家の書を謂ふなり。一たび往きて看覽すれば、亦た微かに片理有り。故に必ず觀る可き者有らんと云ふなり。致は至なり、遠は久なり。泥は泥難を謂ふなり。小道一たび往きて觀る可きと雖も、若し持して事を行はば、遠く至りて經ること久し、則ち泥難して通ずること能はざるなり。」とする。集註は、「泥は去聲。小道は、農圃醫卜の屬の如し。泥は通じざるなり。」とする。農圃醫卜とは農業や医術、占術など、技術的なものを想定している。何晏は小道を異端とみた。「攻乎異端斯害也已（[爲政篇16](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm)）」異端とは、集註では、范氏の言葉として、「楊･墨の如き是れなり。其の天下を率いて父を無みし君を無みするに至る。專ら治めて之に精ならんと欲せば、害を爲すこと甚だし、と」。程子の言葉として「佛氏の言、之を楊･墨に比ぶれば、尤も理に近きと爲す。其の害尤も甚だしきと爲す所以なり。」楊朱･墨子・仏教を異端とした。子夏の時代はそれらは無い。小道の反は大道、大道は[禮運](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/liyun.doc)にあるごとく、孔子の理想の道。■　泥nìは、泥で塗る、拘泥する、渋滞する、耽溺する。

孔子は子夏が小人の儒となることを懸念しており、子夏もそれを自覚し、弟子に小道にこだわることを戒めたものと思はれる。

読書会：[2010年2月25日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年2月25日)

５）子夏曰日知其所亡月無忘其所能可謂好學也已矣

zǐ xià yuē rì zhī qí suǒ wú yuè wú wàng qí suǒ néng kě wèi hào xué yě yǐ yǐ

子夏が曰く、日（ひび）に其の亡き所を知り、月（つきつき）に其の能くする所を忘ること無きを學を好むと謂ふ可きのみ。  
  
子夏が曰く、日々習ったことを忘れないように覚え、月々出来たことを忘れないように努力すれば、學を好むと言ふ他ない。

■　日知其所亡　孔安国は「日びに其の未だ聞かざる所を知る」、亡を無とする。集註も、「亡は無なり。己の未だ有せざる所を謂う」とする。義疏も、「此れ勸人の學なり、亡は無なり、從來謂ふ、未だ識る所の者を經（すぎ）ざるなり。人をして日に其の徳を新たにせしめ、日に未だ識らざる所の者を知る、識りて録せしむるなり。」とする。つまり、知らないことを知るようにする、となる。徂徠はそうでないとする。「一章の内に容（まさ）に“亡”“無”両（ふた）つながら用ふべからず。ゆゑに“亡”とは失なり。日々にその亡失する所の者を知って而る後能く月づきにその能くする所を忘るること無し。“日”と曰ふ者は、その自ら省るの亟（すみや）かなる者を言ふなり。“月”と曰ふ者は、その成を要（す）ぶるの辭なり。」一日一日、ややもすれば、学んだことは忘れしまうものだが、忘れずに積み重ねる努力とみている。■　月無忘其所能　義疏は、「能する所は己に識りて心に在る者を謂ふ。既にして、日日未だ知らざる所を識り、又月月其の能くする所を忘るること無くば、故、識ると云ふなり。如し上事を能くすれば、故、學を好む者と謂ふ可し。然るに此れ即ち是れ“温故而知新”なり。“日知其所亡”は、是れ“知新”なり。“月無忘所能”は、是れ“温故”なり。學を好むと謂ふ可し、是れは師と爲すと謂ふなり。」とするが、徂徠は、「孔子曰く、故（こ）を温（をん）して新を知る（為政篇）、人に教ふる者を以て之を言ふ。子夏は祇（た）だ学ぶ者を以て之を言ふ。ゆゑに温故を語りて知新に及ばざるなり。」とする。

子夏は、人に遅れるとはいへ、真面目にこつこつやる弟子をみて、馬鹿にしてはいけない、それが学ぶということだと後押しした。子夏自身がそうして学んできたのであろう。  
読書会：[2010年3月6日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年3月6日)

６）子夏曰博學而篤志切問而近思仁在其中矣

zǐ xià yuē bó xué ér dǔ zhì qiè wèn ér jìn sī rén zài qí zhōng yǐ  
子夏が曰く、博く學びて篤く志し、切に問ひて近く思ふ。仁其の中（うち）に在り。

子夏が曰く、博く學んで篤く志すといふことは、切に自問して身近なことに思ひ至ることである。仁は其の中に在る。

■　博學而篤志　「博く學んで厚く之を識（しる）す」と孔安国。義疏は、「博は好なり、篤は厚なり、志は識なり、人當（まさ）に廣く經典を學びて、深く厚く之を識し録し、忘れざるを言ふなり。」とする。集註は、程子の言として、「學博からざれば、則ち約を守ること能わず。志篤からざれば、則ち力め行うこと能わず。」とする。

■　切qiè問而近思　何晏は「切（せつ）に己の学んで、未だ悟らざる所の事を問ふ。」義疏は、「切は猶、急なり。若し未だ達せざる所有る事は、宜しく急ぎて諮問して解を取る。故に切に問ふと云ふなり。近思は、若し思ふ所有れば則ち宜しく己が已に學ぶ所の者を思ふ、故に近思と曰ふなり。」とし、集註は、程子の言葉として、「己に在る者を切に問う・・・近く思うは、類を以て推す。」とする。朱子は、「四つの者は皆學問思辨の事のみ。未だ力め行いて仁をするに及ばず。然れども事此に從うときは、則ち心外に馳せずして、存する所自ら熟す。」博學而篤志　切問而近思は學問思辨の事であるが、これを実践すれば自ずと心が耕される、と考える。徂徠はいづれも異なるとし、「切問は切磋の切の如し、逼（ひょく）切して之を出すを謂ふ。「憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず（述而篇）」があり、「近思」「近くを忽（ゆるが）せにせずして之を思ふを謂ふなり」とする。

「日知其所亡月無忘其所能」を実践し、博く學ぶなら、仁といえようか？この姿勢は、まさしく篤く志して學ぶと云へまいか？といふ議論に、子夏は、それでは足りない、學んで何をしようとするのか？その心に偽りはないか？義はあるのか？相手はどう思っているのか？相手に対してなすべきことはやっているのか？口先だけではないのか？何故試さないのか？己の志の篤さのみならず、近（親兄弟・相手・他者）を思ふことなくしては、仁といふは難しいとしたのであろう。

読書会：[2010年3月6日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年3月6日)

７）子夏曰百工居肆以成其事君子學以致其道

zǐ xià yuē bǎi gōng jū sì yǐ chéng qí shì jūn zǐ xué yǐ zhì qí dào

子夏が曰く、百工、肆（し）に居りて以て其の事を成す。君子は學びて以て其の道を致す。

子夏が曰く、百工（職人）は肆（仕事場兼店舗）に居れば仕事が出来る。君子は學ぶからこそ其の道を極めることができる。

■　百工居肆以成其事　周礼、考工記（こうこうき）に、「坐して君を論ずる、之を王公と謂い、作（な）して之を行う、之を士大夫と謂い、曲（つぶさ）なるを審（あき）らかにし、勢（いきおい）を面（かたち）どり、以て五つの材を飭（おさ）め、以て民の器を弁（ととの）う、之を百工と謂う。」とあり、王公、士大夫、百工という身分制度があると、吉川先生。職人であるが、義疏は、「百工は巧師なり、百を擧（あ）げて全ての數（わざ）を言ふなり。肆に居る者は、其れ常の所、物器を作る處に居る者なり。百工、由（よ）りて日日其の常業の處（ところ）に居りて、則ち其の業乃ち成るを言ふなり。」とする。肆の原義は、「陳ずる也」おきならべる、製品をつくるための道具、もしくは製品そのものをおきならべた場所、つまり「みせ」を肆と呼ばれる、と吉川先生。集註は、「肆は、官府造作の處を謂う。・・・工肆に居らざるときは、則ち異物に遷されて、業精ならず」とする。職人というものは、仕事場兼お店に居てこそ、仕事ができる。そこに居ないと他の事に気を取られて精を出すことが無いとする。■　君子學以致其道　義疏は、「致は至なり、君子、學に由りて以て道に至るは、工が肆に居て以て事を成すが如きなり。」とする。集註は、「致むは極むなり。・・・君子學ばざるときは、則ち外誘に奪われて志篤からず」とする。徂徠はこれには不満であり、「學」とは詩書禮樂以て先王の道を學ぶなり。「致」とは、先王の道をして自然に来（きた）り集まら使（し）むるなり。百工の肆に居るは、自らその技の功なるゆゑんの者を知らず。君子の學も亦然り。亦自らその道の我に集まるを知らず、とする。切問而近思とは工人が切磋琢磨して技を極め、物を作るに等しく、その品を求めて買い手が集まらぬことがあろうか。切問而近思して、先王の道を究めれば、人が道を求めて、やって来ないことがあろうか。

読書会：[2010年3月13日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年3月13日)

８）子夏曰小人之過也必文

zǐ xià yuē xiǎo rén zhī guò yě bì wèn

子夏が曰く、小人の過や必ず文（かざ）る。

子夏が曰く、小人が過ちをおかすと必ず飾る（うまく取り繕う）。

■　集註は、「文は去聲wèn。文は之を飾るなり。小人過を改むることを憚りて、自ら欺くことを憚らず。故に必ず文りて以て其の過を重ぬ。」と簡潔に述べる。文wénではない。義疏は、「君子、過有れば、是れ已（すで）に誤りて行ふ、故に爲すに非ざる。故に之を知りて則ち改む。而るに小人、過有れば、是れ知りて故に爲す、故に愈（いよいよ）文（隠し）之を飾る。言を肯ぜず己（おのれ）非ずして、故に繆（うそ）を播（ま）くを云ふ。君子過りて由に及ばず、及ばずして失ふ、心の病に非らず、務（なすべきこと）在りて行ひを改む、故に吝（やぶさか）無し。其れ失ふの理明らかにして、然る後に能く之の理著はる、得失既に辨ず、故に過復た改むる可し。小人の過、情に僞を生む、故に飾らざること能はざる、飾りて則ち彌（いよいよ）張る、乃ち是れを過と謂ふ。」とまどろっこしい。徂徠は君子の過を、「日月の食の如し」過つときは則ち人みな之を知る。ゆゑに君子の過ちは得て之を文（かざ）るべからず。日月も亦之を食すること有り。君子何ぞ必ずしも過ち無からん。改むるときは則ち衆みな之を仰ぐ。ゆゑに之を改むるを貴しと為す。上位に在りといへども其れ猶ほ小人偽るなり。必ずその過ちを文るは、その心細民の如きを以てなり。大位に在りといへども其れ能く君子たるなり。過ちては則ち之れを改むるは、その先王の道を學びて以て民に長たるの徳を成すを以てなり、とする。  
読書会：[2010年3月20日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年3月20日)

９）子夏曰君子有三變望之儼然即之也溫聽其言也厲

zǐ xià yuē jūn zǐ yǒu sān biàn wàng zhī yán rán jí zhī yě wēn tīng qí yán yě lì

子夏が曰く、君子に三變有り。これを望めば儼然。これに即（つ）けば溫。其の言を聽かば厲。

子夏が曰く、君子は三たび容貌が變る。望み見れば儼然としており、近づいてみると溫（おだや）かであるも、其のことばを聽くと厲（きび）しい。

■　集註は、「程子曰く、他人儼然たるときは則ち溫かならず。溫かなるときは則ち厲しからず。惟孔子のみ之を全うす。」とするが分かりにくい。義疏は、「一に、君子正に其の衣冠嚴然にして、人望みてこれを畏る。二に、即は就なり、近くに就きて視れば則ち其の體温（うるは）し、温は潤なり、而して人これを憎まざる、袁氏、注して曰く、温は和潤なり。三に、儼は嚴正なり。其の和潤を見ると雖も、而して出だす言、其れ嚴正なり。前卷に、君子温にして儼と云ふ所以は是なり。李充が曰く、儼は清正、之を謂ふなり。君子は敬して以て内に直く、義以て外の方し、辭正しく體直くして徳容自然に發す、人之を變と謂ふ耳（のみ）、君子は變ること無し。」とする。

吉川先生は嚴yān（平声）は、おごそか、厳格であるが、儼yán（上声）は、規格が保持されている美しさを言ひ、端正なこと。遠くから見ると秋の月のように端正、そばへ行くと春の風のようにおだやかに人を抱擁する。厲には、内部のエネルギーが流れ出るゆえのきびしさ、はげしさ、がある。義疏は、君子の徳の容貌は自然に発するもので、人は変化したと謂ふが、君子が変ることは無いとした、とされた。詩とはかくあるべきものかと感じ入る美しい解説である。

仁斎先生曰く、「之を望むに儼然たるは、禮の存するなり、之に即くや溫なるは、仁の著（あらわ）るるなり。其の言や厲なるは、義の発するなり。けだし盛徳の至り、光輝の著るること、自（おのづか）ら是れ此（かく）の如し。」味ひ有る乎（かな）その之を言ふこと、と徂徠は称した。しかし、盛徳の人のみに非らずして、上になる者、道を學ぶ者、皆そうあるべきと、評しててやまぬ処が徂徠先生である。[述而篇37](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/jutsji.htm)、「子、温にして厲し、威にして猛からず、恭しくして安し。」をも読むべしとのことである。  
読書会：[2010年3月20日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年3月20日)

10）子夏曰君子信而後勞其民未信則以為厲己也信而後諫未信則以為謗己也

zǐ xià yuē jūn zǐ xìn ér hòu láo qí mín wèi xìn zé yǐ wéi lì jǐ yě xìn ér hòu jiàn wèi xìn zé yǐ wéi bàng jǐ yě  
子夏が曰く、君子は信ぜられ而して後に其の民を勞す。未だ信ぜられずんば則ち以て己を厲（や）ましむと為す。信ぜられ而して後に諫む。未だ信ぜられずんば則ち以て己を謗（そし）ると為す。  
  
子夏が曰く、君子は信ぜられて、そうして後に其の民を勞すことができる。未だ信ぜられずして勞さば、民は己を苦しめるものと思う。信ぜられてそうして後に諫めることができる。未だ信ぜられずして諫めるならば、上司は己を謗ると思う。  
■　信而後　信は信ぜられ、と受動形。■　厲は病とする、なやますこと。■　前半は、政治の責任をとるものの人民に対する心得。後半は、その君主に対する心得。と吉川先生。集註は、「信ずとは、誠の意惻怛にして人之を信ずることを謂うなり。厲は猶病のごとし。上に事り下を使うは、皆必ず誠意交々（こもごも）孚（ふか）くして、後に以てすること有る可し。」とする。君子は政治に携わる者を必ずしも前提としていない。義疏は、「君子は國君を謂ふなり。國君若し能く信を行ひ素より著はる、則ち民其の私に非ざるを知る、故に勞役憚らず。故に信を云ふ而して後に其の民を勞すなり。厲は病なり、君若し信未だ素より著はらずば、而して役を動して民を使ひ、民則ち君を怨み私を行ふ、而して横（よこしま）に見て己に病み役（わずら）ふ。江熙云く、君子厲に克つは徳なり。故に民素より之を信じ勞役に服す。故に私で非ざるを知る。信、素より立たずば、民動して以て己に病むと爲し而して其の私を奉るなり。此れ臣下を謂ふなり。臣下信ぜられ若し素より著はれば、則ち君を諫む可し。君乃ち其の我を措きて虚非らざるを知る、故に之に從ふ。臣若し、信未だ素より立たずして忽に君を諫むれば、君則ち其の言を信ぜず、其の言其の諫むる所の事、是れ己を謗るなり。」と君主と臣下の心得と見る。これは[里仁篇26](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm)、「君に事うること數（しば）しばすれば斯れ辱ずかしめらる。」を見るべしと吉川先生。徂徠先生は、[為政篇22](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm)、「人にして信なくば其の可を知らざるなり。大車に輗なく、小車に軏なくば、其れ何を以てかこれを行らむかな」を見るべしとする。  
読書会：[2010年4月3日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年4月3日)

11）子夏曰大德不踰閑小德出入可也

zǐ xià yuē dà dé bù yú xián xiǎo dé chū rù kě yě  
子夏が曰く、大德は閑（かん）を踰へず、小德は出入（しゅつにゅう）可なり。  
  
子夏が曰く、大德は閑（柵）を踰へることはないが、小德は出入してもよい。  
■　閑　閑は牧場周辺の柵から法則、規則の意、と吉川先生。■　孔安国曰く、「閑は猶ほ法（はふ）のごときなり。小徳は則ち法を踰えざること能はず、故に出入りするも可なりと曰ふ」と徂徠先生。集註は、「大德･小德は猶大節･小節と言うがごとし。閑は闌なり。以て物の出入りを止むる所なり。言うこころは、人能く先ず其の大いなる者を立てれば、則ち小節或は未だ盡くは理に合わざると雖も、亦害無し、と。」義疏は、「大徳は上賢以上なり。閑は猶ほ法なり。上徳の人、常に法則に踰越せざる。小徳は中賢以下なり。其の徳を立つるに恆全すること能はず。有る時H6417;至り、有る時及ばず。故に出入を曰ふなり。素より其れ備へず、故に可と曰ふなり。」

為政篇に「七十にして心の欲する所に從ひてに矩（のり）を踰へず。」とある。子夏は孔子のこの言葉を思って述べたのであろう。

読書会：[2010年4月3日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年4月3日)

12）子游曰子夏之門人小子當洒掃應對進退則可矣抑末也本之則無如之何子夏聞之曰噫言游過矣君子之道孰先傳焉孰後倦焉譬諸草木區以別矣君子之道焉可誣也有始有卒者其惟聖人乎

zǐ yóu yuē zǐ xià zhī mén rén xiǎo zǐ dāng sǎ sǎo yìng duì jìn tuì zé kě yǐ yì mò yě běn zhī zé wú rú zhī hé zǐ xià wén zhī yuē yī yán yóu guò yǐ jūn zǐ zhī dào shú xiān chuán yān shú hòu juàn yān pì zhū cǎo mù qū yǐ bié yǐ jūn zǐ zhī dào yān kě wū yě yǒu shǐ yǒu zú zhě qí wéi shèng rén hū  
子游が曰く、子夏が門人小子、洒掃（さいそう）、應對、進退に當りては則ち可なり。抑（そもそも）末（しり）へなり。本（もと）これ則ち無し、之を如何。子夏、之を聞きて曰く、噫（ああ）、言游（げんゆう）、過（あや）まてり。君子の道、孰（いづ）れをか先ず傳へ、孰れをか後に倦（う）まん。諸を草木の區（まちまち）して以て別（べつ）なるに譬（たと）ふ。君子の道、焉ぞ誣（し）ゆ可けん。始め有り卒り有る者は、其れ惟聖人か。  
  
子游が曰く、子夏の門人の若者は、水撒き掃除、賓客の応接、誘導についてはいいが、そもそも末のことである。それの本となるものが無くては、どうしようもない。子夏はこれを聞いて曰く。噫（あ～）言游は過っている。君子の道は、孰が先に傳chuánへるか（早熟で終はるかもしれない）、孰が後に倦juànむか（後に持続できぬかもしれない）、これは草木がそれぞれ育ち方がちがうようなものだ。君子の道は、どうして無いものを有るとし、有るものを無いとできようか。始めも卒（をは）りもある（一貫して持続できる）というのは、それはただ聖人のみではないか（だから誰にでも出来る身の周りのことから修めようとするといふに）。  
  
■　門人小子　門人の若者　■　洒掃　水を洒（ま）いてほこりを静め、それから箒（ほうき）で掃（は）く。■　應對　客との言葉での受け答え　■　進退　前に出たり後ろへ引いたりして客を扱う、日常の生活の整頓、接客からはじめる。■　本之則無　本格的なことにさかのぼることがない、と子游が批判をした。知識と経験を重んじる漢唐学派、実践と直感を重んずる宋明学派。この対立の萌芽がここにあるとされる、と吉川先生。■　噫　深い嘆息、子游はやはり分かってくれないのだなあ。■　孰先傳焉孰後倦焉　孰を日本では何として、倦を飽きるほど教えるとし、何を先に伝へ、何を後に飽きるほど教えるかと釈するが、中国では誰。義疏では、本とは先王之道、君子之道も先王之道、それは深くして遠い。誰なら先に伝え、誰なら後に飽きるか、分からないから、まずは小事を試し、その後に大道を教へる。人の性は同じでなく、先に習った者が怠け、晩年に学ぶ者が飽きる、人それぞれである、とする。集註では、倦は、人を誨えて倦まずの倦の如し。其の末を以て先として之を傳うるに非ず、其の本を以て後として敎うるを倦むに非ず。程子曰く、君子人を敎うるに序有り。先ず傳うるに小さきなる者近き者を以てして、而して後に敎うるに大いなる者遠き者を以てす。先ず傳うるに近小を以てして、而して後に敎うるに遠大を以てせざるに非ざるなり、とする。先と後について、先に、後にと時間的経過で捕らえる場合と、先を簡単なこと、後を深遠なことと捉える見方に分かれる。■　譬諸草木區以別矣　義疏は、或は春に花をつけ風に落ちる、或は秋に榮へて早く實る、君子の道も亦た遲速が有る、とする。集註は、學者の至る所に、自ら淺深有ること、草木の大小有り、其の類、固（もと）より別有るが如し。若し其の淺深を量らず、其の生熟を問わずして、概して高く且遠き者を以て、強いて之に語げれば、則ち是れ之に誣うるのみ。とした。仁斎は、區は域なり、古者園圃に草木を毓（いく）するに各おの区域を分かって之を種藝す。氾勝之「區種の法」を為る是れなり。草木、區にして別かるるは其の明らかなること言ふなり、「書」に曰く、賁（ひ：あやが美しい）なること草木の若（ごと）し（湯誥）、とした。區を類とみて性質の別、区域と見て育つ環境の別とみる場合の差がある。■　誣　ありもしないことをくっつけていう、有を無、無を有とすること。集註は、違（たが）へるとみている。徂徠は、堪えざるを以て堪ふと為し、教ふるにその大なる者を以てし、門人小子をして肆（ほしいまま）にその大なる者に俾（し）むるは、則ち是れ人を誣ふるなり。其の人を量りて之を教ふる、子夏は弟子が高説を聞いて倦むのを恐れた、とみる。■　有始有卒　徂徠は、倦まざるを謂ふなり、とする。  
読書会：[2010年4月10日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年4月10日)  
  
13）子夏曰仕而優則學學而優則仕

zǐ xià yuē shì ér yōu zé xué xué ér yōu zé shì

子夏が曰く、仕へて優（ゆう）なれば則ち學ぶ、學びて優なれば則ち仕ふ。

子夏が曰く、仕へて余裕があれば學ぶ、學びて余裕があれば仕へる。  
■　仕とは役人となりて奉仕すること。優とは余裕が出来ること、と吉川先生。優は“ゆたか”と訓じられる。[学而篇6](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/gakuji.htm)に、「弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹しみて信、汎く衆を愛して仁に親しむ。行ひて餘力有らば則ち以て文を學ぶ。」子夏は餘力を優とし、文を省いた。■　義疏は、學とは、先王の典訓を研學す可しとし、學業に余裕がでて足りると必ず進仕するといふ。集註は、仕と學とは、理は同じで、必ず先ずその事を盡して余裕があれば、其の餘に及ぶ可し。仕えて學ぶときは、その仕事を資（たす）け深めることになり、學んで仕るときは、その學を驗（こころ）みることが廣くなる、とする。■　孔子の仕は君に仕へる、孝、弟、信、仁あっての文、国政が視野にあるがここでは普通の弟子に対する配慮。平成の日本では、孝、弟、信、仁は置き去りにして、民主主義規範のなか、大学まで学ぶ。就職して三年くらいすれば、仕事に慣れて緊張も緩む、その時に遊興に流されず、學を再開すべし。仕事をしながら、ひとつの事を三年も學べば、また、新たな気分で仕事ができる、その繰り返しで、仕と學の双方を進めて行く、怠ることなかれ、餘力を用ゐることで優となる、が子夏。仕事をして、他人の中でもまれ、はじめて分かることもある、学者も一つの職業となった時代、仕と學の理は同じとするももっともである。

読書会：[2010年4月17日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年4月1７日)

14）子游曰喪致乎哀而止

zǐ yóu yuē sāng zhì hū āi ér zhǐ  
子游が曰く、喪は哀を致して止む。  
  
子游が曰く、喪は致すも哀して止めなさい。  
■　子游は子夏同様、文学に優れ、孔子より少（わか）きこと45歳、子夏より1歳少い。武城の宰として孔子が来訪した際に音楽を演奏しており、牛刀で鶏を割くのかとからかわれ、小人道を学べば使い易しと返した弟子。■　禮は其の奢よりは寧ろ儉すべく、喪は其の易よりは寧ろ戚すべし（[八佾篇4](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm)）に関する子游の言葉。孔安國は、「毀（やつ）るるも性を滅せず」と礼記の喪服四制の語を引いて注とする。心を悲哀で充たし、また、衣食住も平常より程度を落すが、そのために生命をなくしてはならない。そうした意味であって礼記の原文をややくわしくあげると、はじめは絶食していたのが「三日にして食し」しばらくは頭を洗わないが「三月にして沐し」麻の粗末な着物を着ていたのが一年たつと絹の冠に替える、つまり「期にして練（れん）」するのは「毀（やつ）るるも性を滅せず」であり、「死するものを以て生きたるものを傷つけざる也」と吉川先生。義疏に曰く、致は猶ほ至なり。喪は禮に哀を主とすと雖も、然り孝子過ぎたる哀にて以て性を滅するを得ず、故に各おのをして極に至り、哀して止むなり、とする。■　集註は、致は、其の哀しみを極め、文飾を尙ばず。而止の二字、亦微（すこ）しき高遠に過ぎること有りて、細微を簡略するの弊（ついえ）あり。學者之を詳らかにすべし、とした。徂徠先生は、致と止の意味を朱子は知らないとし、「止む」は聖人の心。その哀を致すに至りて止め、必ずしもその它（た：他）を過求せざるなり。凡そ「致」字の義は、みな其れをして自然に此の極に至ら使（し）むるを謂ふなり、と。■　子游は孔子がいささか大仰としても、やるべきことはやり遂げる、しかし、限度を心得ているといふことになろうか。  
読書会：[2010年4月17日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年4月1７日)

15）子游曰吾友張也為難能也然而未仁

zǐ yóu yuē wú yǒu zhāng yě wéi nán néng yě rán ér wèi rén  
子游が曰く、吾が友張や能くし難しとす。然れども未だ仁ならず。

子游が曰く、吾が友の子張は人には出来がたいことをやるが、しかし、そうであるが未だ仁ではない。

■　集註では、子張の行高きに過ぎて、誠實惻怛の意少なし、とする。惻怛とは「いたみかなしむ」こと。■　荀子（非十二子篇）の、「その冠を第作（ただ用ゐる）にし、その辭（ことば）を沖禫（ちゅうたん：忌明けのごとく淡白）にし、禹行（苦をいとはず行ひ）して舜趨（しゅんすう：足早に去る）する者は、子張氏の賤儒なり」とは末流を譏（そし）るもので、源を求むると、子張は知るべし。孔子が諸子の仁を問ふに、答ふるを観るに、唯顔淵と子張のみ天下を以て之を言ふ。其の才の大なるのを見るべき、とは徂徠先生の言。陳と蔡の間の危機にあっても、一を貫ぬく凛とした孔子の姿勢が忘れられぬ子張には、自らそれを継ごうとする意気込みがあったのだろう。子游は、しかしながら、それは他人から受け入れられていない、としたのであろう。■　荀子、非十二子篇において子張、子夏、子游の弟子の有様を、こう評した。「其の冠を第佗（だらりとさげ）にし、その辞を示中禫（こだわらず淡白）にし、禹のごとく行き、舜のごとく趨るは、是れ子張の賤儒なり。其の衣冠を正し、其の顔色を斉（ととの）え嗛然（満足）として終日言わざるは、是れ子夏の賤儒なり。偸儒（だらしなく、ずるく、かりそめで）にして、事を憚り、廉恥無くして飲食を耆（この）み、必ず君子は固（もと）より力を用いずと曰うは是れ子游氏の賤儒なり」（森秀樹訳：学習研究社）

[読書会：2010年4月24日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年4月24日)

16）曾子曰堂堂乎張也難與並為仁矣

zēng zǐ yuē táng táng hū zhāng yě nán yǔ bìng wéi rén yǐ  
曾子の曰く、堂堂たるかな張や。與（とも）に並びて仁を為し難し。

曾子の曰く、堂堂としているなあ子張は。しかし、一緒に互いに仁を行ふには難しい人だ。

■　鄭元は、「子游は容儀盛んにして仁道に於いて薄き也」と堂々を専ら容貌押し出しの立派さとするが、主張の堂々さをも含むとしてよかろう。あまりにも立派であって一緒に仁道を行うことはむつかし、と吉川先生。■　曾子（曾參）は孔子より少きこと46歳。日に吾身を三省する人、孔子は、「参（曾子）は魯（にぶい）」と評した。■　與に並んで仁を為し難し、とは「己をして子張と国を隣して以て仁政を行は使むるとき、則ち必ずその下に出でん。」「未だ仁ならず」と「仁を為（す）」とは義を同じうせず、とは徂徠先生。■　その人には出来ても他の者はついて行けない行為。それらは必ずしも人道的ではない、とは吉川先生。■　集註は、「堂堂は、容貌の盛ん。言うこころは、其の外を務め自らを高ぶれば、輔けて仁をす可からず、亦以て人の仁を輔けること有ること能わざるなり、と。」とする。■　子游は子張を未だ仁ならずと評する余裕があったが、曾子は、年上として、自分の考える仁を子張に伝えようとするが、子張は避けたようで、一緒にやることは出来かねた。苦手だったのだろう、気質の違い如何ともし難し。  
読書会：[2010年5月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年5月8日)

17）曾子曰吾聞諸夫子人未有自致者也必也親喪乎

zēng zǐ yuē wú wén zhū fū zǐ rén wèi yǒu zì zhì zhě yě bì yě qīn sàng hū  
曾子の曰く、吾は諸を夫子に聞けり。人未だ自ら致す者有らず。必ずや親の喪か。

曾子の曰く、私は先生から聞いたのであるが、未だ自ら致る者などいない。もし有るなら、親の喪にはじめてわかるくらいのものだろう、と。

■　自分だけで究極まで行けるものはない。必ず学問なり教養の助けを借りて始めて究極まで行ける。この原則にはずれるのが、親の喪、と吉川先生。集註に曰く、「致は其の極を盡くすなり。蓋し人の眞情、自ら已むこと能わざる所の者なり。尹氏曰く、親の喪は固（まこと）に自ら盡くす所なり。此に於て其の誠を用いざれば、惡（いずく）にか其の誠を用いん、と。」■　子張は致命、子游は喪致乎哀と自致者であれと言ふが、自分は出来ていると思っているのだろうな。先生は未だ有らずとおっしゃっていた。弟子をあおるような口調で言ってもらっては迷惑だなあ、もっと自省すべきではないのか、といふ気持ち。親の喪においても、致哀でなくば、もう、どうしようにもない。  
読書会：[2010年5月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年5月8日)

18）曾子曰吾聞諸夫子孟莊子之孝也其他可能也其不改父之臣與父之政是難能也

zēng zǐ yuē wú wén zhū fū zǐ mèng zhuāng zǐ zhī xiào yě qí tuō kě néng yě qí bù gǎi fù zhī chén yǔ fù zhī zhèng shì nán néng yě  
曾子の曰く、吾諸を夫子に聞けり。孟莊子が孝、其の他は能くす可し。其の父の臣と父の政を改めざる。是れ能くし難し。  
  
曾子の曰く、これは私が先生から聞いたことです。あの勇者の孟莊子の孝、他の事はできるかもしれないが、あの勇者にしても、父の臣と父の政治については変えなかった。是れはめったにできることではない。

■　他は它tuō　■　孟莊子　魯の家老、仲孫速、父は孟献子。左伝、襄公十六年に成を包囲した斉の霊公の軍に切り込んだこと、二十年に、邾人がしばしば魯に攻め込んでいたことに、報復のために邾に進攻したのであるが、この時諸侯の軍に魯軍を参加させており、危険な役割を担っていたことが、記されている。（孔子は二十二年生まれ）■　父在せば其の志を觀、父沒せば其の行を觀る。三年、父の道を改むるなきを孝と謂ふべし（[学而篇11](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm)）。徂徠は、これは孔子が古言を並べて引いたもの、古の学みなしかり、と言ふ。■　曾子は親の喪における哀（致哀）、成や邾における危険な任務を果たした（致命）孟莊子の孝を分かり易い実例をもって、先生の見解として述べた。近思の具体化と言へよう。

読書会：[2010年5月15日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年5月15日)

19）孟氏使陽膚為士師問於曾子曾子曰上失其道民散久矣如得其情則哀矜而勿喜

mèng shì shǐ yáng fū wéi shì shī wèn yú zēng zǐ zēng zǐ yuē shàng shī qí dào mín sàn jiǔ yǐ rú dé qí qíng zé āi jīn ér wù xǐ

孟氏陽膚（ようふ）を士師と為らしめて曾子に問ふ。曾子曰く、上（かみ）其の道を失ひて、民散すること久し。如し其の情（じつ）を得ば則ち哀矜（あいきょう）して喜ぶこと勿（なか）れ

孟氏は陽膚を士師（司法長官）に抜擢して曾子に問うた。曾子は、こう言った。上が道を失ひ、民がほしいままに用をなさなくなって随分経っている。そういうことだから、取り調べればろくでもないおぞましい情の動きが分かるだろう。政の貧困と哀れみ襟を正すべきであり、まちがっても手柄と喜ぶようなことはないようにと言い聞かせておきました。

■　孟氏は、劉宝楠（清）が論語正義に「孟懿子」とし、古注の包咸（後漢）は陽膚を曾子の弟子とすると吉川先生。孟懿子は父孟釐子の遺言（BC518）により、南宮敬叔とともに孔子について禮を学んだ。曾子は孔子より少（わか）きこと46歳、孔子が亡くなった時（BC479）は27歳、孟懿子が孟釐子が遺言を得てから39年。孔子の没後のことであり、曾子の弟子が長として仕官できる年齢となれば、孟懿子は相当老齢であり、逆に弟子の年齢は低くならざるをえない。推薦してきた曾子に若い陽膚で大丈夫かと尋ねたとなろう。■　士師　典獄の官、司法の長官　■　民散久矣　集註は、「情義乖き離れて、相維繋せざるを謂う。謝氏曰く、民の散ずるは、之を使うに道無く、之を敎うるに素無きを以てなり。故に其の法を犯すは、已むことを得ざるに迫まれるからに非ざれば、則ち知らざるに陷るなり。」とする。散人は無用の人、散位・散官は位あって職掌のないもの、ここでは、ほしいままで締りがない、役に立たないこと。■　得其情　情は実。吉川先生は、取り調べをして真実が分かる、とされる。情は禮運に、「喜（き）、怒（い）、哀（あい）、懼（く）、愛（あい）、惡（を）、欲（よく）、七つは學ばずして能くす。」とある。犯罪とは人の情をコントロールできなくなり、これに引きずられて一線を越えることにより起こる。そのありさまを把握したとき。■　哀矜而勿喜　吉川先生曰く、書経、呂刑篇に、「哀矜して獄を折（さば）け」「哀敬して獄を折（さば）け」とあり、劉宝楠は、「哀矜とは其の刑に致（おちい）るを哀しみ、其の無知、或いは已むを得ざる所有るを矜（あわ）れむ也」、うまく事実がつかめたとゆめ得意になるな。伝説の王、堯は、「飢えている人がいれば、わたしのせいで飢えている、寒さにふるえる人がいれば、わたしのせいで着るものがない、罪を犯すものがあれば、そのものを犯罪に追いやったのはわたしだと考える」王であったとされる。孟懿子に反省を促している。日に三度自省する曾子らしい言葉であろう。

読書会：[2010年5月22日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年5月22日)

20）子貢曰紂之不善不如是之甚也是以君子惡居下流天下之惡皆歸焉

zǐ gòng yuē zhòu zhī bú shàn bù rú shì zhī shèn yě shì yǐ jūn zǐ wù jū xià liú tiān xià zhī è jiē guī yān

子貢が曰く、紂の不善、是の如く之れ甚しからず。是を以て、君子は下流に居るを惡（にく）む。天下の惡（あく）皆歸す。

子貢が曰く、紂の不善はこのように甚しいものではあるまい。こういうことだから、君子は下流に居ることを惡む。なぜなら、天下の惡、すべてがそこに流し込まれるからである。

■　紂之不善　史記、殷本紀によれば、「帝紂は資辨（能弁）にして捷疾（機敏）、聞見は甚だ敏く、材力人に過ぎ、手づから猛獸を格（う）つ。知は以て諫を距ぐに足り、言は以て非を飾るに足り、人臣に矜（ほこ）るに能を以てし、天下に高ぶるに聲を以てし、以為（おも）へらく皆己の下に出ずる。酒を好み樂を淫らにし、婦人を嬖（好む）した。妲己（だっき）を愛し、妲己の言、是れ從ふ。是に師涓（しけん）をして新たに淫聲（いんせい）、北里の舞、靡靡の樂を作らしむ。賦稅を厚くして以て鹿台の錢を實（みた）し、而して鉅橋（きょきょう：倉の名）の粟を盈たし、益ます狗馬奇物を收め、宮室に充仞し、益ます沙丘の苑台を廣め、多くの野獸、蜚鳥を取りて其の中に置く。鬼神を慢（あなど）り、大いに最（あつ）め沙丘に樂戲す。酒を以て池と為し、肉を縣（か）けて林と為し、男女をして倮（はだか）にして、其の閒を相ひ逐はしめ、長夜の飲を為す。百姓は怨望し、而して諸侯に畔く者有り。是に、紂乃ち刑辟を重くし、炮格の法有り。西伯昌﹑九侯﹑鄂侯（がくこう）を以て三公と為す。九侯に好女有り、之を紂に入る。九侯の女は淫を憙（よろこ）ばず。紂、怒りて之を殺し、而して九侯を醢（塩漬けに）す。鄂侯之と爭ふこと強く、之を辨ずること疾（はげ）く、并せて鄂侯を脯（干し肉に）す。西伯昌之を聞きて、竊（ひそか）に歎く。崇侯虎（しうこうこ）之を知りて、以て紂に告ぐ。紂、西伯を羑里（いうり）に囚ふ。西伯の臣、閎夭（こうよう）の徒、美女、奇物、善馬を求め以て紂に獻ず。紂、乃ち西伯を赦す。西伯出でて、洛西の地を獻じ、以て炮格の刑を除くを請ふ。紂、乃ち之を許す。弓矢斧鉞を賜はり、征伐を得さしめ、西伯と為る。而して費中（ひちゅう：人名）を用ゐて政を為さしむ。費中は善く諛（へつら）ひ、利を好み、殷人親（した）しまず。紂、又惡來（をらい：人名）を用ゐ、惡來は善く毀讒（きざん）す。諸侯此を以て益ます疏（うと）し。」■　不如是之甚也　之はリズムを強め強調するための助字、「是くの如く之甚だしからざるなり」、と訓じると吉川先生。子貢の時代には、孔子が教えた書経や詩の解釈から構成されたのであろう、論語では微子篇に見へる。紂の不善はよく知られた伝承であったと思はれる。しかし、子貢はそこに疑問を抱いていた。人は、一切合財の悪を紂に帰すが、それはご都合主義ではあるまいか。■　君子惡wù居下流天下之惡è皆歸焉　徂徠先生は、「衆悪人、紂に帰して、紂之を受く、その自ら為す所の悪は甚だしからずといへども、衆悪人の為す所の悪は、みな紂の悪なり。ゆゑに天下の悪みな帰す」と曰ふ。集註も、「子貢此を言いて、人常に自ら警省し、一たびも其の身を不善の地に置く可からざらんことを欲す。紂は本罪無くして、虛しく惡名を被れることを謂うに非ざるなり。」としている。子貢の言葉は、君子が下流に居るはよろこばしくない、とは、上流に居れということ、何故ならば、下流には全てが流れ込み、そこで制御しようとしても押し流される他ない。上流から汚水を垂れ流されればこれを如何？上流の水を清くすることこそ君子にふさわしい。子貢は「賜は命を受けずして貨殖せむ。億れば則ち屢（しばしば）中（あ）たる（[先進篇18](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/senshin.doc)）。」貨殖の才（商才）もあり、教団を資金的に支へ、亦、陳と蔡間の窮地から楚へ走り、外交により楚の救出を促すなど、交渉事においては孔子には無い外交能力を発揮した人であり、それでありながら諸侯に仕へず、自らを孔子の器として六年の喪を全うしている。下流、陳と蔡間に置かれた苦境から脱することの困難、周が衰へ春秋から戦国の下剋上という下流に居て、周公の政を復興せしめることの絶望的な状況を、孔子とともに、いやというほど体験した子貢である。紂も殷王朝の最下流に居り、彼に至るまでの諸悪のすべてを飲み込まざるを得ない所に追い込まれたのであろう、もし上流に生まれておれば、その才を違った方向に向けることが出来たのかもしれない。紂が下流に生まれたことの悲哀を思ふ子貢であった。子貢の六年の喪は、孔子を下流とせしめず、そこが基点となる源流とせむための、復活への思ひがこめられていたのかもしれない。  
読書会：[2010年5月22日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年5月22日)

21）子貢曰君子之過也如日月之食焉過也人皆見之更也人皆仰之

zǐ gòng yuē jūn zǐ zhī guò yě rú rì yuè zhī shí yān guò yě rén jiē jiàn zhī gēng yě rén jiē yǎng zhī  
子貢が曰く、君子の過は、日月の食の如し。過てば、人皆之を見る、更（あらたむ）れば人皆之を仰ぐ。  
  
子貢が曰く、君子の過は、日食や月食のごときものである。それが欠けるのを人皆見る（隠せない）。更（元に戻る）と人は皆これを仰ぐ。  
■　日月之食　日食、月食は誰もが目にする、隠し立てできぬもの、ということがひとつ。子貢の時代には、発生の時期を予測することが知られていたといふ。皇侃は、日月食は、日月の故意の行為ではなく、君子のあやまちが君子の故意の所為でないのと同じだとした、と吉川先生。子貢のことであるから、日月食を呪術的といふよりは、自然現象としてみていたのであろう。しかし、日が欠けて、空が暗くなるというのは、不穏なものを人は感じる。■　更也人皆仰之　更はgēng動詞で、日月食から復旧して、元通りになること。そうすると人は今度は仰ぎ見る。皆既日食、ダイヤモンドリングから陽の差し込む様は、神々しい美しさがある。まさに仰ぎ見、感動をする。子貢のこの比喩は、まさに堯を想起せしめる。自分がその器である、師、孔子はかくなる君子であるとした。かく、上流へ、源流へと孔子を奉った。  
読書会：[2010年5月29日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年5月29日)

22）衛公孫朝問於子貢曰仲尼焉學子貢曰文武之道未墜於地在人賢者識其大者不賢者識其小者莫不有文武之道焉夫子焉不學而亦何常師之有

wèi gōng sūn zhāo wèn yú zǐ gòng yuē zhòng ní yān xué zǐ gòng yuē wén wǔ zhī dào wèi zhuì yú dì zài rén xián zhě zhì qí dà zhě bù xián zhě zhì qí xiǎo zhě mò bù yǒu wén wǔ zhī dào yān fū zǐ yān bù xué ér yì hé cháng shī zhī yǒu

衛の公孫朝、子貢に問ひて曰く、仲尼、焉にか學べる。子貢が曰く、文武の道未だ地に墜ずして人に在り、賢者は其の大きなる者を識るし、不賢者は其の小きなる者を識す。文武の道有らざること莫し。夫子焉んぞ學びざらん。而して亦、何の常の師か、之れ有らん。  
  
衛の公孫朝が子貢にこう問うた。仲尼（孔子）はどこで學んだのだろうか？子貢が曰く。文王、武王の道は未だ地に墜ちたわけでなく人に受け継がれており、賢者は其の大なる者を心に抱き、不賢者でも其の小なる者を心に抱く、いづれも文王、武王の道でないものはない。先生にあっては、そこから學ばないといふものはない、常の師、これが無くてはどうにもならないということなどはない。  
■　公孫朝　あちこちに居り、馬融は、「衛の大夫」とした、と吉川先生。子貢は衛の出身であった。■　焉學　どこで學んだか。貧困のなか、十五にして學を志した孔子が、どこで、どのようにして學んだか？貴族の子弟のごとく十五歳で｢大学」に入ることはできず、郷党の学校で、礼儀作法と音楽、弓射や馬車の扱い、読み書きと算数などの六芸を學ぶが精一杯。「吾少くして賤し。故に鄙事に多能なり([子罕6篇](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.doc))。」史記によれば、まずは季氏の委吏（積荷と米倉を掌る役人）となり認められ、司職の吏（職は樴に通じ牧場を管理する役人）と爲り、司空（土木の官）と爲った、とある。鄙事を學び頭角を顕し、貴族の南宮敬叔をたきつけ、一緒に周の蔵室（図書館）を訪れており、詩・書・樂の本場を体験し、35歳の頃、魯より盛んであった斉に渡っており、仕事を通じて學ぶに貪欲であった。■　文武之道　文王、武王の道。學ぶとは、文武の道、いわゆる先王の道。■　未墜於地在人　人によって受け継ぐものは異なるが、道は脈々と人に受け継がれてゆく。■　賢者識zhì其大者不賢者識zhì其小者莫不有文武之道　識shíでは知る、知識のあること。識は志音zhìとあり、記録すること。賢者は大きな道を、普通の人は普通の道を、それぞれがそれぞれの側面を伝へ、伝はらないといふものはない。■　夫子焉不學而亦何常師之有　物を見て、仕事をして、人に会ひて、そこに學ばないものはない。すべてが師である、すべてから學ぶことは可能であるとする。常の師がないから學べぬと嘆くことはない。誰にでも學ぶことは可能である。子貢は孔子のその物の見方に注目していた。現象に現れたものからその源を察知する。子貢が外交において相手を見抜く非凡な才をみせた所以であろう。  
読書会：[2010年5月29日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年5月29日)

23）叔孫武叔語大夫於朝曰子貢賢於仲尼子服景伯以告子貢子貢曰譬之宮牆賜之牆也及肩窺見室家之好夫子之牆數仞不得其門而入不見宗廟之美百官之富得其門者或寡矣夫子之云不亦宜乎

shū sūn wǔ shū yù dài fū yú cháo yuē zǐ gòng xián yù zhòng ní zǐ fú jǐng bó yǐ gào zǐ gòng zǐ gòng yuē pì zhī gōng qiáng cì zhī qiáng yě jí jiān kuī jiàn shì jiā zhī hǎo fū zǐ zhī qiáng shù rèn bù dé qí mén ér rù bú jiàn zōng miào zhī měi bǎi guǎn zhī fù dé qí mén zhě huò guǎ yǐ fū zǐ zhī yún bú yì yí hū  
叔孫武叔、大夫に朝（ちょう）に語（つ）げて曰く、子貢仲尼に賢（まさ）れり。子服景伯以て子貢に告ぐ。子貢が曰く、之を宮牆に譬れば、賜の牆は肩に及べり室家の好（よ）きを窺ひ見ん。夫子の牆は數仞。其の門を得て入らざれば、宗廟の美、百官の富を見ず。其の門を得る者、或は寡し。夫子の云ふこと、亦宜（むべ）ならず。  
  
叔孫武叔が朝廷で大夫に語（つ）げてこう言った。子貢は仲尼（孔子）に賢（まさ）る。子服景伯がそれを子貢に告げた。子貢はこう言った。これを宮牆に譬へてみよう。賜（子貢：わたし）の牆といえば、肩の高さで室家の好さを窺（うかが）ひ見ることができる。先生の牆といえば、數仞もあり、門内に入らないことには、宗廟の美しさも百官の富も見ることはできない。しかし、其の門に入る者は、或ひは寡ない。貴方がそうおっしゃるのも仕方ありますまい。

■　叔孫武叔　魯の大夫、叔孫州仇。定公八年（BC502）に、陽貨が季桓子を殺そうとし、季桓子が孟孫氏の館に逃れたとき、陽貨は定公と叔孫州仇を脅し、孟孫の邸を攻めようとした。これを察知していた成の宰、公斂処父が陽貨を討ち、陽貨は亡命する。その後、孔子が用ゐられ、十年(BC 500)に夾谷の会盟で、孔子は功名を挙げ、大司寇に抜擢される。この頃から叔孫州仇は孔子を意識し出す。一方、諸国放浪後、魯に帰国して以降、哀公11年(BC484)外交交渉で、呉王に窮した叔孫武叔に代わって助け舟を出したのが子貢。哀公15年の斉との交渉にも子服景伯を助けて田常（陳成子）を巧みに説いたとされ（「史記）[子貢遊説記事の檢討](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/cl/koten/roncho/kase_1_1.htm)）、それらの現実から叔孫武叔が述べた言葉であろう。■　語大夫　語yùは動詞で告げる。■　朝は朝cháoで朝廷　■　子服景伯　[憲問篇38](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kenmon.doc)）参照。公伯寮が子路を季孫に愬ふを孔子に告げて注意をうながした魯の大夫。■　宮牆　宗廟之美百官之富とあり宮牆に例へた、宮殿ではない。牆は元来、嗇、穀物倉庫の周囲を爿、版築して（土をつき固めて）造った塀。■　室家　内部の建物。子貢には商才があり、結構いい部屋があったのだろう、土塀越しに覗けば、それが見へる。■　數仞　仞は両手を広げた長さ、八尺、七尺の説がある。■　宗廟之美百官之富　孔子の宮牆の中のことであるが、実際には宗廟もなければ、百官も居ない。しかし、子貢がそう例へた、それは子貢が未来を語ったことになる。■　得其門者或寡矣　現在には存在しないその宮牆に入る者は、或ひは寡し、とはほぼ無いこと、余程の洞察力と想像力のあるものにのみ見える世界。■　夫子之云不亦宜乎　夫子は叔孫武叔、それが見えない貴方がそういうのも仕方ありますまい。

読書会：[2010年6月12日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年6月12日)

24）叔孫武叔毀仲尼子貢曰無以為也仲尼不可毀也他人之賢者丘陵也猶可踰也仲尼日月也無得而踰焉人雖欲自絶其何傷於日月乎多見其不知量也

shū sūn wǔ shū huǐ zhòng ní zǐ gòng yuē wù yǐ wéi yě zhòng ní bù kě huǐ yě tuō rén zhī xián qiū líng yě yóu kě yú yě zhòng ní rì yuè yě wú dé ér yú yān rén suī yù zì jué qí hé shāng yú rì yuè hū duō xiàn qí bù zhī liàng yě

叔孫武叔仲尼を毀（そし）る。子貢が曰く、以て為（なす）こと無し。仲尼は毀る可らず。他人の賢者は丘陵なり。猶ほ踰（こ）ゆ可し。仲尼は日月なり。得て踰ゆること無し。人自ら絕（たた）んと欲すと雖も、其れ何ぞ日月を傷（やぶ）らんや。多（まさ）に其の量（りょう）を知らざるを見る。  
  
叔孫武叔が仲尼を毀っていた。子貢が曰く、おやめになられたほうがいい。仲尼を毀ることなぞできやしません。他の人、之れ賢者としても丘陵のごときもので、踰へてゆくことはできる。仲尼は日月、どうして踰へることなどできましょう。人が自ら絶縁しようとしても、日月は天空にあり絶縁どころか、その日月を傷つけることすらできません。まことにその愚かさをさらすだけのことでしょう。  
■　毀　そしることであるが、呪詛するニュアンスがある。■　無以為也　集註は、「猶此をするを用うること無かれと言うがごとし。」以為は思ふこと、心に抱くこと、そういうことを思ってはいけない。■　他人之賢者丘陵　他は它tuō　丘は孔子の本名　孔子は丘だから大したものではないとでも言ったのか。そこを子貢が、「他の人、之（これ）賢者といふは、丘か陵のごとし」、くらいか。集註は、「土高きを丘と曰い、大阜を陵と曰う。日月は其の至高に喩う。自ら絶つは、謗毀するを以て自ら孔子を絶つを謂う。多は祇zhǐと同じ。適dí（まさ）になり。量を知らずは、自ら其の分量を知らざるを謂う。」■　人雖欲自絶其何傷於日月　絶は色の糸を断つ、叔孫武叔は政権内におり、孔子との関係を絶ち、孔子を除外しようといふことであろう。孔子は天空の日月のようなもので、どこからでも見へるし、天空にあるものは貴方がどうしようと損なうことはできようもない。■　多見其量不知也　多は「ほかでもなく」、適、祇と同じ。量とは、自己の容量、人格の程度、と吉川先生。上に見たように子貢は、交渉において叔孫武叔を助ける立場にあった。上司の立場の叔孫武叔に巧みな比喩を用ゐ、武叔が孔子を毀る愚、毀ることを出来ないものを、自から絶ち、傷つける滑稽な姿を気付かせようとしたが、果たして如何であったものか？余程印象的な出来事として、弟子達に記憶されていた。  
読書会：[2010年6月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年6月19日)

25）陳子禽謂子貢曰子為恭也仲尼豈賢於子乎子貢曰君子一言以為知一言以為不知言不可不慎也夫子之不可及也猶天之不可階而升也夫子之得邦家者所謂立之斯立道之斯行綏之斯來動之斯和其生也榮其死也哀如之何其可及也

chén zǐ qín wèi zǐ gòng yuē zǐ wéi gōng yě zhòng ní qǐ xián yú zǐ hū zǐ gòng yuē jūn zǐ yì yán yǐ wéi zhì yì yán yǐ wéi bú zhì yán bù kě bú shèn yě fū zǐ zhī bù kě jí yě yóu tiān zhī bù kě jiē ér shēng yě fū zǐ zhī dé bāng jiā zhě suǒ wèi lì zhī sī lì dǎo zhī sī xíng suí zhī sī lái dòng zhī sī hé qí shēng yě róng qí sǐ yě āi rú zhī hé qí kě jí yě  
陳子禽、子貢に謂ひて曰く、子、恭をす。仲尼、豈に子に賢るや。子貢が曰く、君子は一言以て知と為す。一言以て不知と為す。言慎しまずんばある可らざる。夫子の及ぶ可らざること、猶ほ天の階（はしたて）て升る可らざるがごとし。夫子の邦家を得ざれば、所謂る之を立つれば斯に立ち、之を道（みちび）けば、斯に行はれ、之を綏（やす）んずれば斯に來り。之を動かせば斯に和（やわら）ぐ。其の生けるに榮へ、其の死するに哀む、之を如何ぞ其れ及ぶ可けん。  
  
陳子禽が子貢に謂って曰く、先生は恭順しておられますが、仲尼はどうして先生より賢るのですか。子貢が曰く、君子は一言で智者となし、一言で不智者となす。言葉は慎しまねばよろしくない。（一言で見抜かれる）。夫子（孔子）に辿りつかぬことは、天に梯子をかけて登ることが出来ぬようなものだ。もし、夫子が邦（国）家を得ておられれば、所謂る治世の方針を立てようとすればそれが樹立され、先生が導かれれば、道が行はれ、人々を安んずると遠くから人が集まって来、働らかせると人々は和す。それに沿って導けば行はれ、先生が生まれられたことが繁栄であり、先生が亡くなられれば哀しみのみ、かような先生にどうして及ぶことができようか。

■　陳子禽　孔子より40歳少く、姓は陳、名は亢、子貢の弟子とされる（家語）。「子貢に問ひて曰く、夫子の是邦に至るや、必ず其の政を聞けり。之を求むるか、抑も之に與るか。子貢が曰く、夫子温良恭儉讓以て之を得る。夫子の之を求むるや其れ諸れ人の之を求むるに異るか（[学而篇10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm)）。」孔子の子、伯魚に父から何か特別の教えを受けたかを問うている（[季氏篇13](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kishi.doc)）のが陳亢でもあった。必ずしも陳子禽とは見なされない、ともされる。孔子を仲尼と呼んでおり、弟子にしては出来ないことであり、政権内に位置を占めていたと思はれる。■　子為恭也仲尼豈賢於子乎　子は子貢のこと。先生は孔子に恭、うやうやしく従っておられる。仲尼は先生より本当に賢いのでしょうか？孔子が諸国放浪から魯に帰国して哀公14年（BC481）に顔淵が亡くなり、15年(480)に子路が殺された。そして、16年に孔子が亡くなる。この間子貢のみ、呉や斉での外交交渉に成果を挙げていた。そのような成果がなく現実政治に批判的であった孔子の評価が低下していたと思はれる。　■　君子一言以為知一言以為不知　君子は一言により、知zhì、で智、不知zhìを不智、智慧ありなしを判断する。■　言不可不慎也　言葉には慎しまざるべからず、慎しみなさい。■　夫子之不可及也猶天之不可階而升也　夫子は孔子、世間では夫子のことを貶めて言ふが、及ぶべくもない。天に梯子をかけて登り至ることができないようなものだ。■　夫子之得邦家者所謂立之斯立　吉川先生は、「家老の一家を得て君主となる」。孔安國は、「諸侯若しくは卿大夫と為るを謂ふ」。集註は、「夫子の邦家を得るときの」政治を主宰する地位に立ったなら。孔子は今、政治から離れておられるが、政治を任されればすぐに行うことが出来る。■　道之斯行綏之斯來動之斯和　道dǎoで導くこと。綏は、車に乗る時身体を安定させるために、「立ちて綏を執る」と用ゐられる。元々は女子の上に手を加え安撫する意、“やすんずる”こと。動は童（僮僕）と力（耒）からなり、農耕に従うこと、労働すること、転じて身をうごかすこと。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「之を立つは、其の生を植（た）つを謂うなり。道くは引くなり。之を敎うるを謂うなり。行うは從うなり。綏んずは安んずなり。來るは歸附するなり。動かすは之を鼓舞するを謂うなり。和らぐは、所謂於（ああ）變り時（これ）雍（やわ）らぐなり。其の感應の妙、神速なること此の如きを言う。」とする。先生が導かれれば、道が行われ、人々を安んずると遠くから人が集まって来、働らかせると人々は和す。■　生也榮其死也哀如之何其可及也　集註は、「榮えりは、尊親せざること莫きを謂う。哀しは、則ち考妣を喪うが如し。」とする。先生が生まれられたことが繁栄であり、先生が亡くなられれば哀しみのみ、かような先生にどうして及ぶことができようか。子貢が周辺に寄せられる名声にとらわれることなく、孔子の器として、六年の喪に服す心が表れている。

読書会：[2010年6月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年6月19日)　　[2010年7月3日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai6.html#2010年7月3日)